様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ９ 月 ２５ 日現在

機関番号：１１４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０２４７

研究課題名（和文）動機減退学習者に配慮したシャドーイング指導法の開発

研究課題名（英文）Development of pedagogical shadowing procedure for demotivated learners

研究代表者
濱田　陽（Hamada, Yo）

秋田大学・学内共同利用施設等・講師

研究者番号：００５８８８３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、動機の低い学習者に配慮したシャドーイング指導法のガイドラインを作成する目的で行われた。まず、学習開始時の動機が低い学習者の方が、リスニング力向上という観点から、不利であることが確認できた一方、シャドーイングはリスニング力が低い学習者の方が高い学習者より効果的であることも確認できた。また、動機減退要因の抑制のためにも、シャドーイングは、学習教材の内容を学習した上で行うべきである。指導法のポイントとして、一回一回の授業内で個人内進歩を感じさせる工夫が必要であり、また、シャドーイングの意義や、練習手順に関する理由も繰り返し説明する必要がある。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to provide a teaching guideline for shadowing, considering demotivated learners. It first found that lower-motivated learners are at disadvantage in terms of listening skill improvement but also found that lower-proficiency learners benefit more from shadowing. To reduce further demotivation, learners should study the target materials before practicing shadowing. For pedagogical implications, teachers should give learners a chance to actually feel their improvement in each lesson, and explain the value of shadowing as well as the theories behind the practice procedure.

研究分野：Applied linguistics

キーワード：Shadowing　Motivation　Listening

１．研究開始当初の背景

1990 年代に英語指導法の一つとして日本に登場したシャドーイングは、2000 年からの 10 年で、急激に広まり、急速にその地位を確立しつつある。徐々に研究が進み、一般的にはシャドーイングはリスニング指導法として用いられ、その効果は主に英語力の低い学習者に現れやすいとされている。

一方、2000 年からの 10 年は、動機減退研究も加速的に進んだ時期であり、日本は動機減退研究が最も進んだ国となった。

しかしながら、動機が低く、英語能力も低い学習者が決して少なくない状況の中、スキルの指導法であるシャドーイングと心理的アプローチである動機減退研究が互いに乗り入れる姿は見られず、この分野において融合されることはなかった。

学習者の状況を考えると、既にいくつもの研究により積み重ねられた動機減退研究の結果をもとに、効果的なシャドーイング法を用いることによって、英語学習動機が低く英語が苦手な学習者であっても、英語学習とくにリスニングへの道が開けるのではないかと考え、この研究の着想に至った。

２．研究の目的

本研究の目的は、日本人英語学習者の動機減退研究と教室内リスニング実践研究の融合であり、動機減退学習者に配慮したシャドーイング指導法の開発と、実践的マニュアルを作成することである。本研究の意義は、リスニング指導法として注目されているシャドーイングについて、動機の低い学習者に配慮した指導法を確立するところにある。その過程で学習者の自信回復を促進し、リスニング力向上と動機減退防止を同時に行う事を狙いとする。

３．研究の方法

まず、動機要因で重要な要素である「自信」の側面について、シャドーイング訓練では実際にどのように働いているかを検証するために、現在のシャドーイング指導法における学習者の心理作用を質問紙やインタビュー調査をもとに、質的・量的に分析を行う。それをもとに、従来の指導手順をどのように改善し、さらに効果的に使用することができるかを検討する。また、指導のポイントを含んだ、指導手順を示すシャドーイングガイドラインの作成も行う。

(1) 平成 24 年度は、リスニングにおける動機減退理由のひとつとしての「自信」についての情報収集を行い、シャドーイングを中心としたリスニング指導法における学習心理に関する情報収集を行った上で、試験的実験を行う。

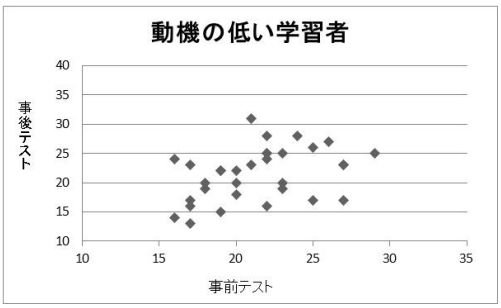
(2) 平成 25 年度は、初年度の情報収集とパイロット研究により整理されたデザインをもとにして、心理面・効果面・評価面などについて、実践研究をもとに、理論と実践の整合性の検討を行う。

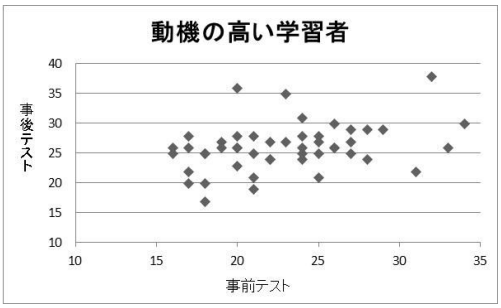
(3) 平成 26 年度は、初年度の情報収集とパイロット・2 年目の実践研究を総括し、不足している点を補った上で、理論と実践の整合性のとれた、「動機減退学習者に配慮したシャドーイング指導ガイドライン」を作成する。

４．研究成果

(1) 平成 24 年度

まず、シャドーイングを用いた実験を、大学 2 年生 80 名を対象に行い、リスニング力の伸長を測定し、効果があることを確認した。そして、実験協力者を動機別（高いと低い）に分類し、再分析した結果、動機の高い群のみに効果があったことがわかった。本研究のキーワードである「動機」による実験協力者の分類のデータを以下の図に示す。





シャドーイングは一般的に英語能力の低い学習者に効果的と言われているが、この図からも分かるように、動機が低く、さらに英語能力も低い学習者への効果は、従来の指導手順では薄いということである。逆を言えば、教師が様々な形で、シャドーイングを開始する際の動機を高める事が、その後のリスニング力の伸長に大きな影響を及ぼす可能性があるということである。

また、同じ実験の協力者から、動機の高低・リスニング力伸長を基準としてインタビュー対象者を抽出し、自信と動機とシャドーイングの関連について分析をした。その結果、仮に最初の段階で自信や動機が低くとも、シャドーイングを重ねていく間に徐々にリスニング力があがっていき、徐々に心理面にもポジティブな影響が現れる事も確認された。

加えて、シャドーイングを行う際は、必ずしも母語話者の音声を使用するだけでなく、非母語話者の音声を使用して

もリスニング力が上がることが確認できた。

(2) 次に、学習内容を先に理解してからシャドーイングを行う場合とシャドーイングを先に行い、後に理解をする場合のリスニング力の伸びを測った。その結果、シャドーイングを行う前に内容を理解した方が、効果があることがわかったことから、特に英語が苦手な学習者や動機の低い学習者のことを考慮して、認知負荷の高いシャドーイングを用いる場合は、学習対象の教材の内容理解をしてからシャドーイングに取り組むほうが良いことが示唆された。

（平成 25 年度）

(1) まず、心理面に関しては、大学二年生を対象に、シャドーイングをしている際の、「自己モニターとペアモニター」のどちらが効果的かを検証した。つまり、シャドーイングはその性質上、自らがシャドーしている時の自分のパフォーマンスをモニターすることができない。そこで、IC レコーダーを使用して自分のパフォーマンスを録音する群と、ペアを組んで、片方のペアがモニターする群を設定した。その結果、他人に聞かれることなく、自分のペースで自らのシャドーイングの様子を確認できる自己モニターの方が、特に英語力が低い学習者に対して効果を発揮することが分かった。毎回の学習者の振り返りシートから、自己モニターをした学習者の方が、ペアモニターをした学習者よりも音声面・文法面などにおいて、細かい発見をしていた傾向があった。これは、ペアモニターではペアの能力が高くない場合、聞き落としてしまう可能性もあること、一方、自己モニターでは録音ファイルを戻って何度もきいたりする機会があるためという事も考えられる。

(2) 効果面に関しては、改めて、シャドーイングは、音声知覚の向上に効果があるということと、リスニング力向上は英語力が低い群に顕著にみられることが大学一年生を対象にした実験をもとに確認できた。さらに、評価面に関して、指導者側の視点から見ると、シャドーイングの効果は、音声知覚の向上の有無、リスニング力の向上の有無により確認できることを再確認した。一方、学習者視点からみると、IC レコーダーを使って自らのシャドーイングの様子を自己モニターすることで、従来は不可能だったシャドーイングのできや向上に対する自己評価が可能になることを確認した。

（平成 26 年度）

根本的なシャドーイングとリピーティングの違いを確認し、指導のポイントとして生かすため、補足的実験を行った。類似したような二つの活動は、効果が異なり、シャドーイングはリスニング寄りの活動で、リピーティングはリーディング寄りということが確認できた。

（全体を通して）

以上をもとに、シャドーイング指導ガイドラインを簡潔に示す。

シャドーイング指導手順

ステップ	手順
1	ターゲット文を聞く
2	小さな声でシャドーイングをする
3	教科書を見ながらシャドーイングをする
4	教科書と訳と見ながら各自チェックをする
5	シャドーイングをする
6	教科書と訳を見ながら復習をする
7	意味を考えながらシャドーイングをする

以下に、ステップごとの注意点を説明する。

(1) ステップ 1
ここでは、指示をしない場合、学習者はただ聞き流すため、ウォームアップを兼ねてしっかりと聞くことを促す。

(2) ステップ 2
実際にシャドーイングを 1 度してみる。ただ、ここでは大半の学習者が音声スピードについていけないため、小声でもかまわないことを伝え、出来なくても極端に気にしたりしないことを伝える。この段階の難解なタスクに必要以上のプレッシャーをかけることは、学習者の動機や自信の低下につながる。

(3) ステップ 3
シャドーイングは、本来はスクリプトを見ながら行う事はしないが、何をシャドーしているか早い段階で確認してシャドーイングを練習したい、確認しなければ不安だという学習者の声を受けて、見ながらシャドーイングのタスクを設ける。

(4) ステップ 4
いったん全体でのシャドーイングをストップし、個人学習にはいる。長い教材であれば 3 分、短い教材であれば 1 分程度、ターゲット題材の復習をする。教室内には英語の得意な学習者も苦手な学習者も混在するため、ここで個人の学習・復習時間を確保することで、個人差にも対応することが出来る。

(5) ステップ 5
再び全体でのシャドーイングに戻る。ここでは 2 回行い、小声でなく普通の声の大きさで行う事を説明する。また、3 回目は、IC レコーダーやスマートフォンに搭載されている録音機能を用いて、自分のシャドーイングのパフォーマンスを

録音する事が理想的である。

(6) ステップ6
その録音した自分のパフォーマンスをスクリプトを使用して確認する。ゆっくり目に時間を設定し、丁寧に確認出来るようにする。このステップも個人差に対応できるように時間に余裕を持ってとるのが望ましい。

(7) ステップ7
この段階になれば、意味もほぼ頭の中に入り、意味を考えながらシャドーイングを行うという高度なタスクにチャレンジすることも可能である。時間に余裕があれば、再度ここでのシャドーイングパフォーマンスを録音し、確認することも好ましい。

その他の注意を下記に列挙する。

(1) 学習者の心理に配慮し、シャドーイングは完璧に出来ることよりも、その過程で音声知覚が研ぎ澄まされるというプロセス重視であることを繰り返し学習者に説明し、納得させた上で取り組ませることが重要である。ただの「作業」になってしまっては、効果が薄まるだけでなく、心理負担になり、逆効果である。

(2) 基本的には、内容理解を終えてから復習の活動として行う方がよい。内容を学習する前にシャドーイングをしてしまうと、負荷がかかりすぎて、特に動機の低い学習者はさらに動機が減退する可能性もある。

(3) 繰り返しになるが、「作業」にならないよう、学習者が自己の向上を認識出来るように、教師が心がけて行くことが必要である。

(4) 多くの練習方法のように、英語の得意な学習者がさらに得意になるような方法と異なり、シャドーイングは、英語力が低い学習者ほど急激な効果が見られるという学術的データを、授業の最初に示す事は、本研究で見られた「初期動機の重要性」の観点からも望ましい。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　5 件）

① Yo Hamada、Uncovering shadowing as an EFL teaching technique for listening、秋田大学教養基礎教育研究年報、　査読無し、17 巻、 2015、9-22

② Yo Hamada、Monitoring strategies in shadowing: self-monitoring and pair-monitoring、 Asian EFL Journal、査読有り、81 巻、2015、 4-25

③ Yo Hamada、 Shadowing: Who benefits and how? Language Teaching Research、査読有り、採択済、

④ Yo Hamada 、 The effectiveness of shadowing practice in improving listening comprehension ability, The Language Teacher、 査読有り、38、 2014、3-14.

⑤ Yo Hamada、The Learner-Friendliness of Varieties of English for Shadowing Training、アジア英語研究、15、2013、23-45.

〔学会発表〕（計　7 件）

① Yo Hamada、Shadowing: Who benefits and how? AILA World Congress 2014、 2014 年 8 月 11 日，オーストラリア・ブリスベン

② Yo Hamada Shadowing and Oral-Reading: Which is effective for what? 日本リメディアル教育学会第 10 回全国大会、 2014 年 8 月 22 日、東京電機大学

③ Yo Hamada, Self-monitoring & Pair-monitoring in shadowing, 40th Annual JALT international conference,2014 年 11 月 23 日、 つくば国際展示場

④ 濱田　陽、学習者心理に配慮したシャドーイング教授法の提案、全国リメディアル教育学会第 9 回全国大会、2013 年 8 月 29 日、広島修道大学

⑤ Yo hamada、shadowing, motivation, and self-confidence 、 39th Annual JALT International Conference、2013 年、20 月 27 日、神戸国際展示場

⑥ Yo Hamada、A teaching technique to improve learners' bottom-up listening skills、Hawaii TESOL 2014、2014 年 2 月 15 日、Leeward Community College

⑦ Yo Hamada、The learner-friendliness of varieties of English for shadowing training、日本アジア英語学会第 31 回全国大会、2012 年 12 月 15 日、文教学院大学

〔図書〕（計　0　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

名称：

発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　0　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
濱田　陽　　（HAMADA, Yo　　）
秋田大学・教育推進総合センター・講師
研究者番号：00588832

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：